

■プロローグ

皆さん、こんにちは。九州大学の花松と申します。よろしくお願いいたします。

“平和と友好のためのボーダーツーリズム”という題名ですが、ボーダーツーリズムという言葉は皆さんご存じでしょうか。「平和と友好のための」とつけましたが、これはどちらかといいますと村田さんからのリクエストでして、私自身は、ボーダーツーリズムそのものが、抽象的な意味での平和や友好に直接つながるというナイーブなことは実はあまり考えていません。私は、境界地域で今現在何が起きていて、どういう変容があるかを研究していますが、その観点からも、ボーダーツーリズムは、むしろボーダー地域、境界地域の人たちにとっての生きる糧になるのだという視点で研究しております。ですので、隣国との関係を直接的に考えているわけではないということをもまず最初にお断りさせていただいた上で、とはいえ、国と国、あるいは国民と国民の関係がうまいぐあいに進んでいくために、何かボーダーツーリズムが資するものがあるとすればどういうことか、について、最後に少しだけご説明させていただきたいと思います。

きょうの内容ですが、まず「ボーダースタディーズ」という一つの新しい学問分野があります。ボーダーツーリズムはその一つのカテゴリーです。ですので、前者についてまずご説明します。それから2番目、3番目に、私が最近よく行っている対馬と釜山の間でのボーダーツーリズムについてご紹介したいと思います。これは2つの側面がありまして、韓国人観光客が釜山から対馬にやってくるという面、それから日本人を対馬経由で釜山に連れていくという面、インバウンド、アウトバウンドという言い方もできるかもしれませんが、この2つの側面についてお話しします。4つ目に、稚内ーサハリン、八重山ー台湾という、日本におけるボーダーツーリズムが対馬だけではなくて、ほかの地域にも発展しつつあることも少しご紹介させていただいた上で、冒頭にも申しましたように、このボーダーツーリズムが平和と友好に役立つのならということが考えられるのかについて、最後に少しだけ説明させていただきます。

■ボーダースタディーズとは

まず、ボーダースタディーズとはいったい何か。これは日本においては比較的新しい学問です。世界的にみれば、よく論じられてきた学問体系ですが、日本ではこれが歴史的に

抹殺されてきました。ボーダースタディーズは政治地理学という学問を基礎にしていますが、この学問は、戦前、戦中に大東亜共栄圏の勢力拡大にうまく利用されてしまったがゆえに、その後遺症で戦後タブー視されます。そのためボーダースタディーズも発展しませんでした。恐らく日本人はボーダー感覚がほかの国に比べてないと思います。もちろん海に囲まれているという地理的な事情もあるかもしれませんが、ボーダーを真剣に考える機会を奪われている可能性があると思います。

岩波書店から「境界から世界を見る ボーダースタディーズ入門」という本が、ことしの4月に出版されました。これが実質、日本でボーダースタディーズの最初の教科書です。内容は、簡単にいいますと、人は空間とか、人の認識、人と人など、差異化を設ける癖があります。そのラインをボーダーと呼んで、そのボーダーが何で引かれたのか、だれが引いたのか、どういうロジックで引かれているのか、そして引かれたものが、また新たに引かれ直す、あるいは消えることはあるのか、ないのか、そうであれば、どういうロジックでそれが変容していくのかを研究するのがボーダースタディーズです。第一部のLGBTの話も、まさにここに入られます。集団の間でボーダーラインを引いて、こっちとあっちという形で区別をすることは、実は非常に恣意的です。しかもそれは人の認識によって、いかようにも変わり得るし、流動的であるということがいえると思います。そういったことを研究するのがボーダースタディーズです。

■ボーダーツーリズムとは

その中で、ボーダーツーリズムの一般的な定義というものは現在存在しません。ただ、従来の観光学の分野ですと、国境を越えるとか、国境に注目するようなツーリズムは一般的に成立しないといわれてきたきらいがあります。しかしつい最近、現代用語の基礎知識2015年版のインターネット版に、ボーダーツーリズムという用語が初めて登場し「国境を挟む境界地域を交流の最前線と位置づけ、観光を通じて関心を高めようとするもの」と述べられています。

先ほども申しましたが、私の関心事は、境界地域が生き延びていくためのすべとしてボーダーツーリズムを産み出し、提唱することです。国境というものは、恐らく日本人にとっては、行きどまり、あるいは辺境のシンボルだったものが、今ですらそうなのではないかと思います。つまり国境の先は何にもない。本当は隣国があるのに、その先は何もない、行きどまりであると感じている。ですので、そこを通る観光、人の流れというものがおよそ考えられ得ないという感覚がどこかにあったのではないかと思うんですが、むしろそう

ではなく、境界地域が生き延びていくためには、その国境そのものを観光資源にして、コンテンツをつくり、国境観光＝ボーダーツーリズムというラベルをつけて売り出していくことを考えているのです。これは私がよく行く対馬では、最近定着しつつあります。

■国境とボーダーは異なる

ボーダーツーリズムかに関連して、似たような言葉として国境観光がありますが、ボーダーツーリズムとは違います。なぜかというと、国境と呼べないライン、国境と呼べない境界地域、ボーダーライン、ボーダーの周辺地域というものが世界じゅうにたくさんあるわけで、そのためにボーダーという言葉を使っているからです。それから観光という言葉は、正確な定義はともかく、物見遊山的なイメージがどうしてもつきまとうように私は感じます。それをツーリズムという言葉を使いますと、実感をもって体感する、感じる、あるいはその中身を学んだり考えるというファクターがついてくるのではないかと思います。これは私が考えている趣旨に合う言葉ですので、「ボーダーツーリズム」といつているわけです。

国境と呼べない地域とは、たとえば辺野古、キャンプ・シュワブがそうです。米軍基地は、形式的には一応日本の主権下なので国境はないはずなんですけど、事実上国境らしきものがある。でも、これは当然沖縄の中ですから、国境ではありませんね。こういったものをどう扱うか。普天間基地もそうです。日本人が特別な資格や許可がなければ、足を踏み入れることはできません。ここには国境はありませんが、しかしボーダーはある。こういうものをみるツアーというものは、あり得ます。

北方領土の水晶島もそうです。政府の公式な見解では国境は択捉島の先にあり、北方領土は日本領ですが、事実上は水晶島と根室の納沙布岬の間にボーダーラインがあります。細かく言えば、水晶島の手前の貝殻島と納沙布岬の中間線が事実上の日本とロシアのボーダーラインということになっています。こういうものは、やはり国境ではありませんが、ボーダーです。

世界に目を向けますと、韓国と北朝鮮の軍事境界線であるDMZも暫定的な停戦ラインですが国境ではありません。板門店も同じです。イスラエルとパレスチナを考えると、パレスチナを国家承認している国は大変少ないですし、イスラエルもしていませんので、イスラエルとパレスチナの間のボーダーラインは国境ではない。だからここを訪れるツアーは「国境観光」とは呼べないわけです。

もう一つ、似たような言葉で、国際観光という言葉があります。海外旅行みたいなもの

だと捉えていただければいいのですが、世界観光機関による「国際観光客」の定義は、少なくとも自分が住む国以外の国に、1泊以上滞在をする人のことです。日帰りする人は恐らくビジネスで、観光客ではなく単なるビジターだと捉えられています。けれども、国境観光の多くは日帰りですから、いわゆる海外旅行やインバウンド、アウトバウンドの枠組みでとらえ切れない状況がボーダー地域では生じていて、その状況をうまく説明するためには、やはりボーダーツーリズムという言葉が必要だと考えています。

■ 3つのかたち

ボーダーツーリズムの中身は、大きく3つのカテゴリーに分けられます。

一つは、国境線や国境地域をみる、感じるというものです。もちろん越えようと思って越えられるところであればいいんですが、先ほどのDMZや北方領土、イスラエルとパレスチナの間は、越えたくても越えられません。けれども、そのボーダーをみたい、越えないけれども、その線、あるいは地域を見に行く、感じるということが、ボーダーツーリズムの一つのカテゴリーとして成立するだろうと思います。これは紛争地域に多いです。

二つ目はボーダーを渡る、越境するクロスボーダーツーリズムです。これはできることならば、越えてみたいですね。我々日本人だけではなくて、国境を越えるというものは、一般的には非日常体験ですから、ひとつの目的になり得ます。

3番目は、境界をみることとか、境界を渡ることを目的にするのではなくて、境界、あるいは国境があるからこそ得られる利益を得ることです。一番簡単なのは、免税品ショッピングです。後で対馬の例で申しますけれども、手軽に隣国に異文化体験に行くことなどが一つの目的として考えられます。

その中の二番目、越境するクロスボーダーツーリズムの中にも幾つかカテゴリーが、既に学者によって分けられています。同じ九州大のセルゲイ・ゴルノフ氏によれば、主にEUとロシアの関係をみると、だいたい次のようなカテゴリー分けになると。まずは通常の観光旅行のほかに、ガソリンツーリズム——安いガソリンを入れに国境を越えて、すぐ30分ぐらいで帰ってくるもので、EUとロシアの間でよく行われています。それからアルコールですね、お酒を買いに行く。また医薬品を買いに行ったり、あるいは安くて質のいい医療サービスを受けに行ったりすることもあります。女性の方には大変いいにくいのですが、セックスツーリズムも現在あります。それからアカデミックツーリズム、スタディツアーですね。国境をみる、感じる、越えることを学ぶために、わざわざ越えていく。それから公用視察ツーリズム。日本も行政や自治体関係者がよくやります。それからノスタル

ジックツーリズム、これは境界線が歴史的によく動いている地域で見られます。例えば、ロシアとフィンランドの間のカレリヤ地方では、この100～200年間だけみても、境界線がかなり動いていまして、かつてのフィンランド領で今ロシア領という地域があり、なおかつ手つかずの状態に残されています。フィンランド人にとってみれば、そこはかつての、フィンランドの姿が残されていて、ノスタルジーを感じる対象としてとらえられています。そういったものをみるために、隣国へ出かけていくのもボーダーツーリズムの一つです。

ほかにもいろいろございます。アメリカとメキシコの国境でよくみられるのは、メキシコ側のティファナとアメリカ側のサンディエゴで、国境のフェンスを両方から見るようなタイプのツアーもあります。さっきのフィンランドとロシア国境、これは私も行きましたが、イマトラというところで越えます。別に何かあるわけではありません。C I Qがあって、そこをバスや車で越えるだけですが、一応非日常体験ですので、みんなで楽しく記念写真を撮ったりします。

フランスとスイスの国境地域にあるスキー場では、場内に国境があり、このスキー場で楽しむだけで、1日に何回でも国境を越えることができます。こういったことを一つの観光のコンテンツとしているところは、世界じゅうにいくらでもあります。フィンランドとスウェーデンの間のグリーンゾーンゴルフコースでは、1番から18番まで通すと、何回か越境しなければなりません。ここもかなり人気があるようで、越境することそのものが人々の何がしかの関心を呼ぶことは確かにあるのだらうと思います。

日本では、陸伝いの国境はないんですが、県境はありますね。県境を見て回るといって、ある種マニアックな方々が確かにいらっしゃるようで、テレビ番組でも取り上げられたりしております。こういうボーダーラインを見ることに引きつけられる人というのは、どうもいるみたいですね。

■日本の国境はどこ？

日本の国境地域の中で、こういったボーダーツーリズムが可能なのは一体どこか、という話に移っていきますが、海上保安庁の「日本の領海等概念図」をみますと、実はこれは「自称」日本の海ということなんです。実際は、不安定な海域という、形式的に境界確定が済んでいない海域があります。北方領土は、当然ロシアとまだ条約を結んで、境界確定していませんね。稚内とサハリンも同様で、事実上は中間線を引いて実務的にやりとりをしていますが形式的な国境線はありません。日本海では竹島がそうです。日本と韓国の間で境界確定は済んでおらず、現在は日韓の暫定水域ということになっており、日韓双

方の船が自由に入って漁ができるとされ、事実上棚上げの状態になっています。

南のほうでも、日中の暫定水域があり、これも日中双方の船が自由に出入りできているところがあります。尖閣諸島もご存じのとおり不安定です。与那国島と台湾の間も、日本と台湾の間に平和条約がないため境界が確定していません。これも稚内とサハリンと同じように、中間線で処理がされていますが、形式的な国境線ではありません。

最後に沖ノ鳥島、日本は一応島だと主張していますが、世界的には岩礁だといわれており、岩礁でも領海はとれますが、排他的経済水域の基点にはなり得ません。ですので、もしこれが岩礁だとされると公海になってしまいます。このように、日本の隣り合う国との間の海域は、実はほとんどが係争地域です。その中で唯一の例外が、対馬と釜山の間なんです。この間は、領海も、あるいは経済水域もちゃんと中間線で合意をされています。

■対馬と韓国人観光客

私がよく行く対馬の話に徐々に移っていきます。対馬の位置をみますと、福岡から 132 キロに対して、釜山が50キロです。済州島よりも北にあります。済州島はもちろん韓国領ですが、恐らく済州と韓国本土の距離よりも、対馬と釜山の距離のほうが短いと思われませんが、それでも対馬は古来から日本領として認識されています。境界線も確定していますので、ここは、法的には、何の問題もないエリアです。

朝鮮半島から九州に渡るルートのちょうど真ん中なので、古来、人、文化、物、お金の流れは、すべて対馬を経由していた。すべてとまではちょっと言い切れませんが、大まかには対馬を経由していたということです。そしてそれは、恐らく今もそうです。韓国人観光客が今たくさん対馬に来ております。非常に多いときには1日に 3,000人、4,000人のレベルです。フェリーターミナルが韓国人でごった返している状況で、バスは多いときにはターミナルの前に、20台、30台と並んでいます。

位置関係を改めてみてみますと、対馬は結構南北に長い大きい島で、車で一番上から一番下まで、ほとんど信号がないにもかかわらず3時間かかります。今一番ホットなのが、対馬の一番北側にある比田勝港というところです。南の厳原が対馬の中心地で、市役所があるんですが、こちらにも韓国人がたくさん来ています。比田勝港と釜山港の間は、ジェットfoilで1時間、厳原が2時間です。飛行機は、福岡空港と長崎空港に飛んでいますが、所要時間は20～30分です。

人口は3万3,000人です。この3万3,000人の島に、大量に韓国人がやってきています。対馬への外国人の入国者の98%～99%が韓国人です。残りの1～2%は欧米人の方で、主

に釜山に観光ビザで滞在されている方が、ビザの更新で日帰りをされています。

2011年、東日本大震災、それから福島第一原発の放射能漏れの事故で、韓国人観光客が激減します。その結果、この当時までは韓国の船会社が1社で独占をしていましたが、その船会社が運行を停止したときに、やはり対馬と釜山の間の人の流れをとめてはいけなと、JR九州が高速船事業に参入します。するとその後すぐ、未来高速という韓国の会社も入ってきて、3社体制になりました。1社の独占から3社になり、運賃が劇的に下がりました。その影響で、2012年には一気に3倍以上、15万人に膨れ上がりました。一番安いときで、釜山から対馬へ、往復1,000円です。だいたい普通は日帰りのバスと、それからお昼ご飯がついたパックで、大体5,000円か6,000円ぐらいです。2014年は20万人弱が訪れています。

日本の港別の外国人入国者数をみると、成田が一番多いのは当たり前ですが、9位と10位に対馬がランキングしています。この比田勝と巖原の数を足すと、大体博多港と同じぐらいの入国者数になります。本当に離島で何にもない小さい島なのですが、まさにインターナショナルな港になっているのです。また、日本人がほとんど入国していないのも一つ特徴です。

比田勝にスポットを当てててみますと、半数以上が日帰りです。釜山から1時間ですので、もう泊まる理由がありません。もっとも泊まる場所がないことも事実上問題ではあるんですが、1～2割の方がリピーターです。一方で日本人観光客をほとんどみかけることはありません。

韓国人は、対馬の自然がすごくきれいだと言います。韓国もきれいなところがあるけれども、大陸系ですからちょっと違うんだそうです。ここには三宇田浜という、日本で渚百選に選ばれているビーチがあり、夏はここで泳いだり、得意の自撮り棒で写真を撮ったりしています。

ほかにも、リアス式海岸の浅茅湾や、きれいな山や海が満載ですので、韓国人は非常に楽しんでおります。最後に、スーパーに行って、日本のスナック菓子——うまい棒とか、ポテトチップスを箱買いして、あるいは缶チューハイを買いまくって、持ってきた空のスーツケースにいっぱい詰め込んで帰っていきます。

最近はこの状況ですが、少なくともこの間までは、メインの目的は免税品のショッピングでした。しかし対馬にはデューティフリーショップがないので、みんな釜山のフェリーターミナルのロッテ免税店で買ったものを、スーツケースに満杯に入れて対馬を

往復していたんですね。

■「似て非なるもの」に人は動かされる

対馬に韓国人がたくさん来る理由を簡単にまとめたいんですが、チケットが安いとか、免税品が買えるとか、自然もきれいだし、日本の食料品も安く買えるしと、手軽に国境を感じられる、自分の国を対岸の島からみられる、ということもあるんですが、恐らくこれは国境研究、ボーダースタディーズの概念でいう“expected unfamiliarity”で説明がつくと思います。日本語に訳しにくいんですが、あえて訳すとすれば「似て非なるもの」と理解してください。日本と韓国は、文化的にもかなり似ていますよね。でもよく観察すると違う。こういった手軽な異文化体験をリーズナブルにできる、という点が恐らく韓国人が対馬にたくさんやってきている大きな理由だろうと思います。

この概念を持ち出したのはEUの研究者ですが、EUは事実上国境がなくなっています。人の移動が簡単に自由にできる。その結果、人のモビリティが逆に落ちています。国境がなくなって、こっちとあっちの風景や物事が同じになってしまうと、人は移動する理由を失うんです。だから、ある程度差異がないと人は動かない。そのことをとらえて、ある程度予想ができる範囲内の差異というものを確保できる状態が、人のモビリティをもっとも促進するとEUの研究者はっています。

ですから、ボーダーがある世界よりは、ボーダーレスの時代、世界がいいとか、あるいはEUのように、インテグレーション、統合したほうが人はハッピーになるという議論がありますが、ハッピーになる面もあるいっぽう、人の移動に関しては、逆にマイナスに作用する可能性があり、そういう面で、観光の分野からどうみるか、というのが一つの問題提起です。

■対馬の現状と課題

韓国人観光客がたくさん来ておりますが、対馬の中でいろいろな問題もあります。対馬固有の問題もあるし、あるいはインバウンドで今たくさん外国人観光客を受け入れている日本の各地に共通する問題もあります。対馬で今一番問題になっているのは、文化の差異によるマナー問題です。対馬以外でもそうですが、例えばトイレの使い方とか、ご飯の食べ方とか、宿泊施設の利用の仕方とか、もっとひどいときには、10年前、20年前までは、レジで精算する前に、お菓子をあけて食べるとか、そういったこともされていて、対馬の人たちはかなり苦労されて、何とか改善してもらおうように働きかけたりしていました。ようやくこの10年、20年たって、お互いが理解し合えるようになったそうですが、とはいえ、

やはり文化が違いますので、別に悪意があろうが、なかろうが、文化的な差異によるトラブルというものは生じてしまいます。

それから、昨年と3年前、仏像が韓国人の窃盗団に盗まれました。対馬の人もカンカンに怒っていますが、一方で、対馬の島内の寺院を回りますと、国宝級の仏像が、もう手にとれるようなところに普通に置いてあるんです。だからこれは日本人だろうが、韓国人だろうが、簡単に盗っていける状態だったわけです。そういう意味で、ボーダー地域である対馬の人々も、もうちょっと適正な防犯意識をもついいトレーニングになっているのではないかと私は思っています。

また韓国人観光客に、対馬に何を期待するかをアンケートやヒヤリングで調査をしています。意外にも、言葉はわからないにもかかわらず、日本人とコミュニケーションをとりたいという希望が多くあります。ところが、対馬に行くと、中心部でも日本人が歩いていません。地元の人も歩いていないし、日本人観光客もほとんどいませんから、韓国人がいくら日本人と話をしたいと思っても、現状では実現できていない。もともとは観光地ではありませんので、町全体で韓国人を受け入れる状態には、残念ながらなっていません。とはいえ、現状では韓国人観光客が落としてくれるお金にかなり頼り始めている。もともと対馬というのは、漁業で成り立っている島なんですけど、日本のほかの地域と同じように、魚がなかなかとれず、観光客が落としてくれる収入によって、何とか島を維持していこうと、かじを切りつつあります。

それから観光業者でも、韓国人観光客が落としてくれる収入でかなり助かってはいるんですが、原発事故の放射能漏れとか、昨年のセウォル号事件とか、自分たちがコントロールできない原因で、観光客が激減して収入が減るということは、対馬の観光業の方々にとっては脅威です。そういう意味でも、今はあまり来ていない日本人にもっと来てほしいわけです。恐らくここが重要なところだろうなと私は思っています。

■新しい取り組み

ただ、日本人を対馬に連れてくるのは結構大変です。先ほど、対馬にいかれたことのある方はお聞きしたら、一人しかいませんでしたね。多分こんな状況なんです。高い交通費を払って、あんな離島に行くかといわれれば、かなりハードルが高いと私自身も思っています。ですので、対馬を最終のデスティネーションではなく、対馬を経由して釜山に海外旅行をする、と。福岡の人でも、東京の人でも、大阪の人でも、恐らく対馬に行くというのは立派な新しい国内旅行だと思います。その国内旅行と釜山に行く海外旅行を組み合

わせるという、国境観光という新しい方法を対馬で確立して売っていくのがいいのではないかと思います。

そういうことを考えるときには、認識の転換が一つ必要だと思われます。先ほどから申し上げていますが、日本人は国境が行きどまりだと思っている。その先は何もないし、辺境だし、一番端っこだ、と思われているわけですが、そうではなく、こっちとあっちの交差点、ゲートウェイ、インターセクションというように認識を転換して、日本と韓国のつなぎ役だという売り方で対馬はやっていくべきだろうというように思ったわけです。

それで2年前に、九州経済調査協会という、九経連のシンクタンクがメインで企画をして、モニターツアーを1泊2日で実施しました。中身は省略しますが、結果的に31人参加され、対馬への国内旅行と釜山への海外旅行を組み合わせる国境観光には非常に興味をもち、満足もされました。ただ、1泊2日で、対馬に泊まらずその日のうちに釜山に出かけてしまった。観光業の方々はどこが一番お金が落ちるか、宿泊と夜のご飯、お土産です。それなしで釜山に出かけて行ってしまったがために、対馬の人たちも、素通りするだけなら別に連れてきてもらわなくてもいい、という批判もいただきました。参加者の方々も、対馬が素通りで速すぎたので、もっとゆっくりみたかったというニーズがアンケート調査で明らかになりました。ですので、この点をフォローする形で、ことしの3月にもう一回モニターツアーを実施しました。この結果が大変盛況で、メディア等でも取り上げられ注目していただいています。

■ 2泊3日のモニターツアー

行程は対馬1泊、釜山1泊の2泊3日です。ターゲットは、第1回目は若い女性にしました。なぜかといいますと、既に福岡と釜山の間というのは、百万人単位で人が動いておりますが、その多くはコスメ、ファッション、食事等々をメインの目的にしている若い女性です。そういう層を対馬にいったん寄ってもらい釜山に行くという戦略を立てたわけです。ですので、対馬の多くの史跡をパワースポットと読みかえて、対馬でパワースポットを楽しみつつ、釜山で食事とショッピングを楽しむという計画を立てたんですが、残念ながらこれはあまりふるいませんでした。そこを踏まえて、今回の3月のモニターツアーは、あまり明確なテーマ設定をせず、通常の対馬観光と釜山観光に、国境に関連するような体験型プログラムを地元の人とつくって織りまぜました。

対馬まで飛行機で30分、それからバスで比田勝まで北上し、釜山にジェットfoilで渡り、博多港に戻ってくるコースです。対馬空港に着いたら、浅茅湾というリアス式海岸

に行きます。ここは近くに「かなたのき（金田城）」という、日本で始めてできた城があります。中大兄皇子が、朝鮮半島から新羅が攻めてくるのに対して防人を立てて守らせた城で、その城を海からみたり、幕末にロシアとイギリスに占領された史跡が浅茅湾にはたくさん残っているので、国境の島、最前線のダークな歴史もクルーズで海から学んでいただきました。浅茅湾を上からみる展望所では、松島より美しいという声もありました。

歴史民俗資料館では、朝鮮通信使の歴史を学びます。文禄慶長の役以降、日本は李氏朝鮮とは断絶状態にありましたが、対馬藩は朝鮮と交易をしないと生きていけません。ですから国書を偽造してまで江戸幕府と朝鮮王朝の間を取り持った、これが朝鮮通信使のはじまりです。その偽造した国書がこの資料館にあります。

また、真珠のアクセサリー作りの体験も行いました。真珠は、銀とともに対馬が古来から中世、近世にかけて、朝鮮半島と交易をするときのお金のかわりでした。まさに国境アイテム。そして対馬の真珠は、田崎やミキモトにたくさん卸していて有名ですが、対馬ブランドとしてはほとんど認知されていない。ですので、地元の婦人会がアウトレットを安く買いとって、手作りのアクセサリー売る取り組みを去年ちょうど始められたので、その団体をお願いして、観光客にアクセサリーづくりを体験してもらい、非常に好評でした。

日露戦争の記念碑もあります。日本海開戦で戦死した両国の兵の名前が全部この碑に刻まれています。また沈没したバルチック艦隊から漂流したロシア兵が200人ほど対馬に漂着し、対馬の地元住民が水と食料を与えて介抱して、その後に、旧日本軍に引き渡すという歴史もあり、そういうことを一つのコンテンツとして、地元の人にレクチャーを受けて学ぶ、ということもしました。

さて、次は釜山港に向かいます。釜山では、歴史館や博物館で釜山と日本、あるいは釜山と対馬のつながりを学ぶんですね。参加者が一番感銘を受けていたのが、朝鮮通信使のとらえられ方です。日本において朝鮮通信使は、豊臣秀吉の朝鮮出兵によって断絶した日韓関係をうまく復活させ、友好関係を維持するためにポジティブに機能してきたという説明がされますが、韓国側の朝鮮通信使歴史館に行くと、大陸の、朝鮮半島のより進んだ文化を、どれだけ日本に伝えたかという面が非常に鮮明に語られるわけです。同じ歴史的なイベントに対して、日韓でこれだけ説明、あるいは強調のされ方が違うということ、参加者の方々は実感されていました。

その後は釜山タワーから街を望み、免税品のショッピング、町中を歩いて、約3時間かけてジェットfoilで博多港に戻ってきます。

■ニーズが明らかに

参加者は、狙い通り年配の、どちらかというとお金と時間を持て余されている方、旅なれている方に来ていただきました。その中でも、釜山と対馬に両方にもう既に1回以上、別々の機会で行かれたことがある方が全体23名のうち6名いらっしゃいました。こういう方々が、この旅をどう感じたかがのちのポイントになるんですが、申し込み時点で、「国境観光」にかなり敏感に反応されて申し込んだことがわかっています。しかも、半分ぐらいの方々が、前からそういう旅に興味があったんだそうです。

実施後のアンケートの結果、対馬にとても満足された方が73%、やや満足が23%で、合わせると9割以上の方々が満足をされています。65%がぜひまた行きたい、35%が、また機会があれば行きたいと、実に100%の方々がリピートを希望されました。

釜山側も含めた旅行全体では、非常に満足したが55%、やや満足が35%で、こちらも合わせて9割方の方々が満足されています。そして対馬と釜山、両方行きたいという方々は75%いました。さらに対馬と釜山に、既に別々に行ったことがある6名に聞いてみますと、6名のうち4名が非常に満足で、5名が、再度対馬と釜山の両方に行きたいと。これは結構驚きで、対馬と釜山、国境地域の両側に別々の機会で行くのととはまた違う、別個のニーズがあるということがわかります。もちろんコスト面、いろいろな要素を総合的に判断しなければいけない面はありますが。

■これからの企画

ですので、また懲りずに、この8月にモニターツアーを実施しようと思っております。これは今度は年配の方々ではなく、小学生と親子がターゲットです。国境の島だからこそ、手づかずに残されている自然があります。それを夏休みに思い切り体験してもらい、人生初の海外旅行を対馬から釜山に国境観光してもらおうというコンセプトです。

ほかに、稚内ーサハリン、八重山ー台湾の企画が今走っております。この企画そのものは、NPO法人の国境地域研究センターがメインで企画をしていて、九州大学と北海道大学が協力しています。この稚内・サハリンの旅行は今現在催行中で、昨年、日本とロシアの間で、ビザが72時間免除になったのをうまく使って、稚内から、フェリーでおよそ5時間強のコルサコフに渡り、ユジノサハリンスクをはじめいろいろ回って、3日後に帰ってくるコースです。

稚内ーサハリンでは9月に別の企画の予定があります。敗戦まで日本の北の国境線であった北緯50度線を訪れる企画です。ここは日本の国境観光の先進地域、一番最初に国境観

光がされたところでした。戦時中は要人が北緯50度線に行って国境標石を見たりしていたそうで、それを追体験するという企画です。

また、国境観光は国境を越えず、国境をみる、感じることで成立しますので、オホーツク海を根室から稚内まで車で走ってみる企画を10月に予定しています。

もう一つは、八重山—台湾です。これは2011年に、私が前に所属していた北海道大学のスラブ・ユーラシア研究センターが主催して、チャーター便で与那国から台湾の花蓮に渡り、セミナーを行いました。与那国と台湾の間は定期便がないため、チャーター便を出しましたが、すごく大変でした。なので次回は定期便をうまく使うため石垣に戻り、そこから台北に渡る経路を考えています。

■本当のターゲットは

以上の企画が、何を狙っているか。東京に来て、こういうことをお話しするのは、非常にいいにくいところがありますが、国の中央、東京の人は国境地帯がどうなっているか、あまり知らないですね。中央にいればいるほど、周辺のことにはなかなか知らないですし、情報が入ってこないし、実際に行くのもすごく大変だと思います。けれども、やはり国境地帯に行って、みて、感じて、いろいろなことを考えてもらいたい人たち、ターゲットは、やはり私は東京の人だと思っております。中央の人にむしろみていただいて、例えば、日韓関係でも、東京とソウルの外交関係だけではない日韓関係が境界地帯にはあるということは、そこに行かないとわからないわけです。そういった意味で、やはり東京の人にこういったボーダーツーリズムを体験してもらいたいので、再来週、ANAさんに協力いただき、ボーダーツーリズムの説明会をさせていただくことになっています。

■平和と友好に資するか否か

最後に、ボーダーツーリズムは平和と友好にどう資するのかということです。とても難しいテーマです。といいますのも、境界地帯の人々が生きる糧として、どのようにボーダーツーリズムをつくって利用していくか、国境をむしろ観光資源として利用することを考えてきましたが、国家間や国民と国民の関係について、何かポジティブな影響があるから取り組んできたわけではないからです。ただ、間接的には、あるいは可能性の話としては、恐らくあり得るだろうというように思います。

いくつかの要素に分けてお話ししますが、例えば、1つ目は、韓国人観光客がたくさん対馬に来て、この10年、20年マナー問題で対馬の人はかなり大変な苦勞をしてきましたが、それでもさまざまな形でコミュニケーションをとって、何とかよくなってきた。このプロ

セスは、いってみれば異文化理解のプロセスと位置づけられます。たしかに異文化理解は対馬でなくてもできますが、恐らく個人レベルでしょう。国境地域は、社会として異文化をどう受け入れて対応していくかを、格闘しながら、歴史的にも、そして今でもやっている。そういったプロセスをみることによって、社会としてどう隣国とつき合っていくかという、何かのヒントが出てくるのではないかと私は思っています。

それから2つ目、ボーダーや国境の歴史と現在を学ぶことですが、冒頭に述べましたように、日本人がそれらを考える機会を奪われていたのではないかと私自身は感じています。日本人がボーダーツーリズムを経験することによって、いかにボーダー、国境が恣意的に引かれ、なおかつ恣意的に引かれ直されているのか。あるいは、形式的に国境があるにもかかわらず、実質的には意味がない、逆に形式的に引かれていないにもかかわらず、実質的には意味のあるものとして扱われている、ということを経験することによって、隣国、あるいは国家間関係を実感をもって学べる機会になるのではと思っています。

それから3つ目ですが、平和を訴える、考えさせるというのは、これは念頭に置いているのは紛争地域で、例えば、最初のほうでお話したイスラエルとパレスチナの間でのことですが、パレスチナ側のオリーブの森を、イスラエルが焼き払うわけです。オリーブはパレスチナにとってかなり大きな収入源ですが、その収入源を絶たれるということは、非常にきつい。パレスチナ、あるいはイスラエルの人が、今の状況を改善するために、わざわざクロスボーダーツーリズムとして、パレスチナ側に命がけでオリーブの木を植えるという活動をしています。こういう活動はいつ爆撃されて死ぬかわかりませんから非常に危険ですが、そういった意味で、平和をポジティブに訴えていく手段としてのボーダーツーリズムというものもあるだろうと思います。

それから4つ目は、私がもともと考えていることです。境界地域、国境地域が生き延びていくための糧としてのボーダーツーリズム、境界地域の持続可能な発展のためのボーダーツーリズムが発展することは、境界地域が行きどまりではなくて、むしろインターセクション、ゲートウェイになるということです。ゲートウェイになれば、人通りがふえます。人通りがふえるということは、例えば対馬のように韓国人がたくさんいるけれども、日本人はいないという状況が多少は改善されるだろうと思います。アンバランスな状況がより安定的な方向に行くとするれば、それは間接的にはありますが、日韓関係にはプラスになるだろうと思っています。

それから5番目が一番お話ししたいことかもしれません。日本人の国境感覚を取り戻す

ということです。もちろん韓国、中国、ロシアが日本の隣接国だと皆さん頭ではわかっているけれども、実感として隣り合っているという意識は恐らくないと思います。海に囲まれていますし、社会として隣人としてつき合っていく経験が、多分これまでもありませんでしたし、今でもそういう機会は、あまりあるとはいえないと思います。そういった意味で、日本人にとっての韓国人、中国人、ロシア人、台湾人というものは、かなり抽象的な意味での他国民という感覚でおつき合いしているのではないのでしょうか。そこを隣人として認識を転換する契機になるのではないかと思います。国は、引っ越しができません。どんなに隣人が嫌いでも、つき合っていかなければいけない。そういった状況に置かれてこそ、初めて、隣人との現実的な意味での友好関係につながっていくのではないかと。抽象的な意味ではなくて、実感を伴った上での友好関係——ボーダーツーリズムはそういうものを考える一つのきっかけになるのではないかと考えています。